

田立森林公園の植物採集

下野園 正

第101回例会は、昭和59年7月7・8日、木曽谷で昨年に続いての採集会としておこなわれた。

木曽谷右岸の南端、木曽郡南木曽町田立の滝周辺で、阿寺断崖の上下の極端な植生の違い、即ち、阿寺断崖段丘部の田立森林公園湿原植生と、田立の流周辺及び下部暖地性植生というねらいで計画した。参加者は当日参加も含めて、井波一雄、大木正夫、大塚孝一、小口好久、奥原弘人、尾台喜貞、橋誠治、堤久、中村英夫、馬場多久男、古谷義人、山崎惇、和田清、幹事下野園の14人であった。

第1日、宿泊場所は田立の滝下の大前民宿。午後から雨が降りだして、賦国国有林の調査に張切ってこられた奥原先生も、雨にとじこめられて苦勞なさったが、今をさかりのサギソウが陳列してあるしずも園でしばしの目の保養をなさっていた。参集にはそれぞれおもわくがあって、全員揃ったのはやや遅れたが、例によって植物鑑定にはじまり植物の話が夜ふけまで続けられた。

第2日、あいにくの雨となり、民宿の方をお願いしていたマイクロバスを断わり、各自の車で森林公園だけでも見ることにした。豪雨とはいえないがモヤがたちこめており、例の急崖地をとる林道沿いのこわさも気付かないまま林道終点の森林公園入口についた。公園への入口歩道は水みちとなって歩くのに苦勞した。公園付近は滞水で溜池みたいになっており、地面からメタンガスがふき出している状態がみられた。折角であるので雨の中湿地での植物観

察が続けられた。

公園に入ってます、コバイケイソウの花盛りにびっくりした。樹木類は生長不良であるが、本数の多いネズコの小径木、主幹は枯れていたが下枝の生き続けているコウヤマキが目立った。配列不順であるが気付いた植物名を示す。

サヤマスゲ、ヒメカンアオイ、ヘビノボラズ、ハリガネワラビ、ホソバカンスゲ、コカンスゲ、オタルスゲ、ゴカヨウオウレン、クロソゴ、アオゴウソ、ツルアリドウシ、コバノイヌツゲ、トキソウ、ノギラン、ナガバキソチドリ、ハナヒリノキ、キョウマルシクナゲ、レンゲツツジ、モウセンゴケ、ヤマドリゼンマイ、ハリガネカズラ、マイヅルソウ、コバイケイソウ、ウチワマンネンズギ、フウリンウメモドキ。

奥原先生はヒメモチを見つけないといっておられたが、雨もやまないで断念して下ることにした。案の定、途中林道は土砂崩落でふさがり肝をつぶした。皆さんの御協力で土砂を取除き、ようやく通過できて有難かった。田立の滝の下部植生だけでもと滝元までいったが、雨宿りするところもなく、大前民宿まで下りて、ぬれた衣服を乾かしながら昼食とし、食後しばらく懇談していたが雨も止まなかったので1時過ぎに解散した。

植物分布としていろんな要素の混在するなかでの調査をねらったが、雨のため一部の調査に終り不本意な例会であったが、参加者の御協力を感謝します。

野々海池周辺の植物採集

渡 辺 隆 一

第102回例会は、日本植物学会中部支部例会と合同で、昭和59年9月29日(土)～30日(日)におこなわれた。参加者は当日参加者を含めて、和田清、春原弘、中沢袈裟延、井波一雄、古谷義人、大塚孝一、尾台喜貞、井上圭子、荒井律子、中村英夫、奥原弘人、高橋博之、平林陸男、小口好久と案内役の田中茂、幹事の渡辺隆一の16名であった。

夕方、野沢温泉の民宿「たけい」に集合、名物の外湯にのんびりつかり、夕食。中部支部会よりさし入れのビールで乾杯の後自己紹介。食後、田中氏か

ら明日の見どころと行動予定等の説明がおこなわれ、奥原氏から植物誌の進行具合等の話や、早くも本日採集してこられたイワウメツル等の植物の話でにぎわった。

30日はあいにくの小雨であったが、全員が車に分乗して宿を出発。途中平林で日本海側分布のナラガシワ、虫生のオオバボダイジュ(それぞれ村の天然記念物)の大木を見学。ユキツバキの分布南限線をこえて西大滝ダムに。サケ放流の話を聞き、貧弱な魚道には首をかしげる。国道117号から見おとしそ

うな小道にはいると、ひたすら林道を登ってゆく。やがて、ブナ林があらわれ尾根上につくと野々海池。まず手前の小池からさっそく観察、採集を始める。奥原氏にミヤマシラスゲ、ヌマガヤ、カンガレイ、ミヤマホタルイなど湿性植物を教わる。霧の野々海池畔を歩いて池に流入する小沢を登ってゆく。途中で、ザゼンソウ、ミヤマシシガシラ、オクノフウリンウメモドキ、チョウジギクなどを見ながら、いよいよ、お目あてのオニシオガマ、オオバツツジの地点につく。オニシオガマは数株が花をつけており、かわるがわるフラッシュで撮る。両者とも寒い時代

〔秋季例会合宿調査報告〕

天竜川流域の植物採集

伊 藤 文 男

第103回例会は、昭和59年10月20日(土)～21日(日)、下伊那郡の南端の静岡県、愛知県に隣接する天龍村を会場に植物採集会が行なわれた。晩秋の時期なので暖帯地の植物の自生する当地を選定した。参加者は当日の参加2名を加えて、奥原弘人、和田清、古谷義人、中澤袈裟延、中村英夫、卯ノ原慶助、佐々木政臣、小口好久、渡辺隆一、幹事の馬場多久男、案内役の下平洋雄、伊藤の12名であった。

第1日目。参加者の大方は午後6時までに市橋旅館に集合した。夕食前には幹事の馬場先生が持参された植物標本について奥原先生の説明を聞き論議に花を咲かせた。今日は小雨の天候であったので、夕食時には明日の快晴を祈念して地酒の喜久水で乾杯をした。自己紹介を兼ねて寄せ書きを行ない、それぞれが近況を語り談笑した。夕食後は和田先生が豊丘村に出かけて、本年5月に2昼夜にわたり延焼した山火事の跡地を視察してこられたのでその状況聞き、山中で採集された植物を見ながら意見の交換を行なった。

第2日目(10月21日)当日参加者は市橋旅館にて合流し、午前8時出発。日本の気圧配置が昨日と変わりやや寒い日となったが、厚い雲は去り、秋晴れの日となって一行は喜ぶ。午前中は天龍川の龍西地区の松島、長沼地籍を、午後は龍東側の満島、下山、中井侍と龍西側の坂部まで湖岸通路に沿って採集を行なう。採集地の標高は260～370mの地域である。

旅館を出て天龍川の堤防に出る。途中シュロ、ヤラビ、ウラジロガシ、アラカシ、マンサク、ジュウモンジシダ、スルガテンナンショウ、ヒサカキ、ヤ

からの生き残りと考えられ弱々しい感じであった。しだいに霧も晴れてきた湖畔で昼食。後に車で新潟県側に降りてみる。峠ではヒメカイウを発見、林道わきで点々と群れ咲いているオニシオガマに出合い驚いた。静岡から参加の井波氏はカリヤスモドキと並んで生えていたオオヒゲナガカリヤスモドキに感激。さらに、下の畔でもオニシオガマを見つけた。松ノ山温泉まで足を伸ばして、裏山を一回り、コシジタピラコ、ミヤマアキギリを採る。ここで解散、一部の人は温泉を楽しんだ。新しい発見もあり有意義な会であった。

ブツバキ、アラカシ、ヤブミョウガの採集。またモウソウチクの見事な竹林を見る。満島と対岸の松島にかけられた大橋は昨年秋の10号台風で流失したので仮設道路を通り対岸につく。松島、長沼地籍の採集を開始する。

道路沿いの崖にはオオバエノモトソウの群落が見事である。群生するヤブミョウガの果実は黒色に色づいており、ヒヨドリジョウゴの鮮紅色の果実、カニクサの²⁵萼は2m以上に生長し孢子葉が見事である。一行は標本採集と写真撮影に余念がない。奥原先生がアズマヤマアザミを見つけて「低地に咲いていることは珍らしい」と言いながらアザミ談議が続く。この辺の植物は、ヤブツバキ、アラカシ、アオキ、ヤブミョウガ、テイカカズラ、ナンテン、ヤマハゼ、イワデンダ、ヒメワラビ、ミヤマイボタ、モチツツジ、ヤブウツギ、アカメガシワ、リンドウ。

路傍にスルガテンナンショウが赤い実をつけている。奥原先生はこれを見て偽茎や附属体の説明を始めると一行は集まり聞き入る。ベニバナボロギクが多く目につく。近年急速に分布が拡大しているが、戦後ダンドボロギクが伊那谷に侵入し群生すると住民は「終戦草」と呼びその繁殖力の旺盛なのに驚いたが今では衰退している。やがて平岡ダムの堰堤に出る。峡谷の紅葉が美しい。この附近の路傍には、アオミズ、ヒナタイノコゾチ、カラスノゴマ、クス、ハナタデ、ヤマウルシ、コンテリギ、シバヤナギ、クラガリシダ、ウロコノキノブ、ゴマナ、クマワデシャジン、ヤマハゼ、リンドウ、ヤマユリ、アオミズ。